再訂

明治讀本

芳賀矢一編

巻四

4a
810
明43

41680
教科書文庫
4
810
41-1910
20000
71951

資料室
4a
810
明43

明治四十三年一月二十六日
文部省檢定濟
中學校國語科用

文學博士 芳賀矢一編

再訂 明治讀本

東京 合資會社 冨山房發兌

広島大学
教
71951
図書

目次

再訂 明治讀本 卷四目次

一 錦の直垂……一
二 金崎城址……大町桂月……五
三 三老人(書翰文)……九
四 親族……國定讀本……一三
五 歐羅巴と米國……三宅雄次郎……二〇
六 沙漠の月……大橋乙羽……二五
七 笑話二則……齋藤綠雨……三〇
八 人(口語文)……坪井正五郎……三三
九 人體の生活現象(口語文)……丘淺次郎……三六
一〇 臺灣人の風俗……物集高見……四一

一一 樟腦……四七
一二 森（韻文）……佐々木信綱……四九
一三 森林の功用……五一
一四 植物の感覺（口語文）……三好學……五四
一五 樺太（書翰文）……五七
一六 鷲狩（口語文）……幸田露伴……六一
一七 蘇武（韻文）……坪内雄藏……六六
一八 東宮殿下の御逸話……大町桂月……七三
一九 サンスシーの宮……建部遯吾……八一
二〇 神社……八四
二一 佛閣……八八
二二 松雲禪師……大町桂月……九三

二三 日光の月夜……田山花袋……九九
二四 江の嶋鎌倉……大和田建樹……一〇六
二五 死して惜しまるゝ人たれ……嘉納治五郎……一一〇
二六 近藤眞琴……近世英傑傳……一一七
二七 下瀨火藥……一二四
二八 狂熱……大町桂月……一三〇
二九 平清盛と源頼朝……三宅雄次郎……一三四
三〇 品性……一三八
三一 人と自然……一四三

卷四目次終

オーサウ
塵殺
皆殺

再訂

明治讀本　卷四

奇襲

散々に打ちなされて

一　錦の直垂

平家の大軍は倶理伽羅谷の奇襲に殆んど塵殺せられ、佐良、安宅共に支へず。且戰ひ、且退きて、篠原、成合に到り、返り擊つて大に戰ふ。されど勝ちほこつたる木曾が軍の鋭き鋒先に當り難く、維盛、忠度散々に打ちなされて西走す。

癖者

此時平家の軍中より、赤地の錦の直垂に黑絲縅の鎧を著たる一人の武夫、馬の首を廻らし踏み留りてぞ戰ひたる。木曾の勢より「信濃國住人手塚太郎光盛」と名乘りて馬を駈け寄せ、從卒と共に左右よりかの武者に組み附き、三人一度に轟と落つ。手塚が從卒おさへられて首搔かる。その隙に光盛敵の草摺引き上げて之を刺し、やがて頸をぞ取りたりける。手塚首をば大將義仲の前へ持ち行きていふやう、「光盛唯今癖者の首取つて候。名乘れと申せば、『思ふ仔細あり、名乘るまじ。木曾殿は御覽じ知るべし。』とばかりにて名乘らず。侍かと見れば錦の直垂を著たり。大將かと見れば、續く者なし。京畿西國の者かと思へば阪東聲なり。若き者かとすれば、面の皺七十餘に疊めり。老者かとすれば鬢髮黑くして盛りと見ゆ。何者の首にか候はん。」といふ。

ゝにもや

半白

あな無慙や

義仲うち案じて「あはれ、武藏の齋藤別當にもや。但しわが幼弱の時彼は半白の頭なりき。今ははや白髮なるべきに、實に不審なり。樋口兼光は古同僚にて知りたらん。」とて召し出す。樋口髻を取りて、かの首を打眺め、やがてはらはらと泣き、「あな無慙や、實盛にて候。」と

大人氣なし

かりそめの物語

白髮の尉

失はる

いふ。『鬢髮の黑きは。』と問はるゝに、「されば其事思ひ出でられて候。實盛日頃申しゝは、『弓矢取る者、老體にて軍に出でんには、髮をば黑く染めんと思ふなり。其故は、髮白くして若者と先を爭はんも大人氣無きに似たり。敵もかひ無き老武者とや侮らん。頭は黑きこそ善けれ。』とかりそめの物語の後の形見となりて候。」とて、兼光水を取り寄せ、彼の頭を洗ひ見るに忽ち白髮の尉とぞなりにける。

義仲も涙を浮べ、歎じていふやう、「我二歳にして父を討たれ、我も失はるべかりしを、此尉の情によりて、木曾へ送られ、遂に成人して一門の仇を復する事、偏に實盛が恩によれり。その志いかでか忘るべき。今古稀の齡を以て君家に殉す。武人の習とはいへ、哀れなる事なり。この首よく〳〵葬れよ。」とて落涙しければ、並み居る猛き兵ども、各袖をぞ絞りける。

古稀の齡

二　金崎城址

敦賀の町はづれ、小山の海に臨める處、石段を攀ぢて金崎宮に詣づ。尊良、恒良二親王を祀る。實にこれ金崎の城址、尊良親王の自害し給ひし處、延元の昔を思へ

悲劇

將家の子

ば、誰か涕涙なからむや。新田義貞が比叡山に熱涙を揮つて後醍醐天皇に別れまつり、皇太子恒良親王と尊良親王とを奉じて、この雪深き北陸の地に落ち來りしは、何等の悲劇か。金崎の孤城、賊の大軍に圍まれて、勢日にちゞまりければ、外に援を求めんとて、義貞は弟の義助と共に城を出でて杣山に據り、金崎を援はむと心を碎きし程に、城は早くも陷りぬ。城を守りしものは義貞の長子義顯なりけるが、その如何ともすべからざるを見て、尊良親王の前に跪きて、「今は力及ばず、臣は將家の子、城を枕にして死せざるべから

皇室の胄

血統

ず。殿下は皇室の胄、賊といへども害を加へ奉らじ。暫くこゝを落ち延びたまへ」。と、涙ながらに申しければ、親王うち笑ひ給ひ、「われは元帥ぞ。徒に死を惜むものとおもふか。たゞ自殺の法を知らず、われに教へよ。」といとけなげなる御言葉に、義顯さらばとて、刀引きぬきて腹かき破り、その刀を親王にすゝめて伏しぬ。親王その刀を執り給ふに、血潮ぬめりて握るべからず。乃ち衣の袖にて卷きて、同じ刃に伏し給ひぬ。嗚呼何ぞ其悲壯なる。皇太子恒良親王は、尊良親王の御弟なり。城陷る前に遁れ出で給ひしが、賊に捕はれ給ふ。城

陷りて後、城中を檢するに義貞兄弟の首なければ、親王に向ひて、其存亡を問ひまつりしに、「既に自害して、其屍骸は燒き棄てたりと聞きぬ。」と答へ給ひければ、大に安心して、親王を京師に送る。尊氏之を幽し奉りぬ。然るに、義貞は眞に死せるにあらずして、杣山城より起りて賊の數城を拔きければ、尊氏大に親王を忌み、毒藥をすゝむ。親王毫も臆せず、悠然として之を仰いで薨じ給ひぬ。慘又慘、賊の暴戾、何ぞ一に此に至れる。往事茫々茲に五百年、城址の山海澨より起つて、東に走り、綠樹滴るが如くまた碧血の痕を留めず。われ

慘又慘
一に此に至る
海澨
碧血の痕

史を讀んで、二親王が壯烈なる御心と、悲慘なる御最期とに泣くこと久しかりしが、今現に其故城址に來り、二親王を祀れる祠前にぬかづきて、愈感慨に堪へず。曉深うして石壇人なく、我ふる神鈴の響木魂に徹す。山沈々として恨を含み、北海の浪むなしく山脚に咽ぶ。

（天町桂月）

額ヌカツキ
突ツキ

三　三老人

昨日當村役場に於て、石川純一、佐藤正、高橋長兵衞とて、いづれも本年七十歳の高齡に達せる三老人の爲

長壽

に、古稀の長壽祝賀會相開候。石川老人は當村小學校創立以來、教員兼校長を務められし人、佐藤老人は永らく某地方裁判所の判事を勤め、數年前より歸住せられし人、高橋老人は當村の老農に御座候。

一理あり

壽宴の半、列席の人々、長壽の方法を質問いたし候處、三老人の申さるゝ所、皆一理ありて面白く候。石川老人の申さるゝに、「自分は若き時より、朝は必ず六時に起き、夜は必ず十時に寢ね、適當の運動、適當の勉學、毎日の日課を規則正しく定めて、如何なる時も變更せず、毎日學校に出でゝ生徒の顏を見るを何よりの樂

處世の方針

心に愧づる

星を戴いて出で月

として、三十年來一度も缺勤したることなし。長壽の養生法とて別に考へ當る事なし。」と被申候。

佐藤老人は「余は司法の職務に從事して、公平を保つといふ事のみを專一にし、假にも人に向つて僞言をいはず。たゞ正直といふことを以て處世の方針と爲し、余が一言一行少しも自分の心に愧づる事なき樣毎日工夫せり。これ或は長壽の法か。」との話有之候。

高橋老人は「余はもとより貧なれば、何一つ甘き物も喰ひたる事なけれども、甘き物喰ひたしともおもはず、よき衣着たしともおもはず。毎日星を戴いて野に

を戴いてかへる

合點

出で、月を戴いて家に歸り、たゞ作物の生立を樂しむのみにて、心配といふもの少しも無し。人は心配するは何より短命の基なり。」との趣旨にて答へられ候。三老人の說を集めて考へ候に、規則正しき生活をなすこと、正直なる心をもつこと、物事に心配せぬこと、この三つは成程長壽の方法に相違あるまじと合點いたし候。たゞ衞生法をやかましく注意するのみにては、到底長壽は得られぬことゝ悟り候。

四　親族

血族
姻族
直系
傍系

民法は財產上の事柄と身分上の事柄とにつきて、人と人との間に生ずる關係を定めたる法典にして、我等が生活上に密接なる關係を有せり。今其中につきて親族に關する規定の一斑を揭ぐべし。

民法に所謂親族とは、六親等內の血族、配偶者、及び三親等內の姻族をいひ、普通に所謂親族の意義とは大に異なり。血族とは血統の連續せる者をいひ、之を直系親、傍系親の二とす。直系親とは自己の出でたる者、例へば祖父母、父母の如きと、自己より出でたる者、例へば子孫の如きとをいひ、傍系親とは同始祖より出

で、分派せる者、例へば兄弟、姉妹、伯叔父母の如きをいふ。次に配偶者とは、夫よりは其妻をいひ、妻よりは其夫をいふ。又姻族とは、夫婦の一方より他の一方の血族をいふ。即ち夫の血族は妻の姻族にして、妻の血族は夫の姻族なり。

配偶者

世數

親等は親族間の世數によりて之を定め、一世を以て一親等とす。而して血族なる直系親の關係に於ては、自己より上又は下に數へて之を定む。例へば、父母及び子は一親等にして、祖父母及び孫は二親等なるが如し。又血族なる傍系親の關係に於ては、自己より同

始祖に溯り、更に其始祖より其傍系親に下るまでの世數によりて之を定む。例へば、兄弟姉妹は二親等、伯叔父母は三親等、從兄弟姉妹は四親等なるが如し。姻族の親等は自己の配偶者を本として之を定む。其方法は血族の場合と異なることなし。

同一の戸籍を有して親族の組織する團體を家といふ。家の長を戸主といひ、戸主の親族にして其家に在る者、及び其家に在る者の配偶者を家族といふ。

戸主及び家族は皆其家の氏を稱す。戸主は其家族の居所を指定し、其婚姻又は養子緣組をなすとき、之に

拒否
扶養

同意し、又は之を拒否する權利などを有すると共に、又其家族を扶養すべき義務を有す。

男子滿十七年、女子滿十五年に達するときは婚姻をなすことを得れど、直系血族又は三親等内の傍系血族の間に於ては婚姻をなすことを得ず。子が婚姻をなすには、男子は滿三十年、女子は滿二十五年に達したるときの外、其家に在る父母の同意を得るを要す。

而して妻は婚姻によりて夫の家に入り、入夫及び婿養子は妻の家に入る。夫婦は互に扶養すべき義務を負ひ、妻は夫と同居すべき義務を負ふ。

獨立の生計
成年者
親權

子ありて親子の關係を生ず。子には實子と養子とあり。實子は血統の連續せる者にして、養子は他人の子を以て自己の子としたる者なり。養子は緣組の日より、養親の家に入り、養家の嫡出子たるべき身分を得。」

獨立の生計を立つる成年者、即ち滿二十年に達したる者の外、子は其家に在る父の親權に服す。父死したるとき、家を去りたるとき、又は親權を行ふこと能はざるときは、家に在る母親權を行ふ。親權を行ふ者は、子を懲戒し、未成年の子の監護及び教育をなし、其居所を指定し、其職業を營むことを許否し、其財産を管

心神喪失

理するなど、種々の權利義務を有す。

未成年者に對して親權を行ふ者なきとき、心神喪失の爲に禁治産の宣告を受けたる者あるときなどには、此等の者の爲に後見人を設く。後見人は被後見人の財産を管理し、且之に代りて、其財産に關する諸般の行爲をなす。其他未成年者の後見人は、親權を行ふ父又は母と同一なる權利義務を有し、禁治産者の後見人は、禁治産者の資力に應じて、其療養看護を務むるを要す。

禁治産

後見人

民法には又相續に關する事柄を定めたり。相續に關

家督相續

遺産相續

する事柄は、以上述べたる事柄と關係深きがゆゑに、今又少しく之を説明すべし。

相續には家督相續と遺産相續とあり。家督相續とは、戸主死亡の場合などに其權利義務を相續するをいふ。而して相續人は親等の遠近長幼の關係など、一定の順序によりて定まる。即ち子は孫に先だち、兄は弟に先だちて家督相續人となるなり。又遺産相續とは、家族死亡の場合に其財産に屬する一切の權利義務を相續するをいふ。此相續も亦民法にて定められたる順序によるなり。

（文部省、國定、讀本）

五　歐羅巴と米國

我國人の、米國を巡遊して歐洲に行くもの、前者の進歩の測り知られざるに反し、後者の因循にして、守舊に傾き、一の見るに足るあらずとして、僅かに一瞥し去る。然るにまづ歐洲を巡覽して後米國に及べる者は、米のあまりに殺風景にして亂雜を極むるに驚き、何の稱すべきを見ずとして、匆々通過し去る。均しく歐米文物を觀察するもの、唯その順序を異にするに因りて、しか全く相反するを免れざる、蓋し自ら其理

因循守舊
一瞥し去る

殺風景

なくばあらず。

我國人の米國に遊びて、まづ目に入るは、家屋の宏大なると機械の應用遍きとなり。其家屋中には三十階を越ゆるもあり。就て仰望すれば矗々として天を摩せんとす。先此意外に宏大なるを見て、然る後に歐洲に赴き、其三四階乃至五六階なるに接す。誰か他の大なるに比して遙に小なるを感ぜざらん。

米國は機械の裝置大なるに於て、殆ど他に比すべきなし。シカゴの屠畜場は大なる機械を裝置し、一時間を經ざる間に、幾百頭の豚を屠り、且罐詰にし了る。其

高く聳える様

矗々として天を摩せんとす

裝置

規模の宏大なるを觀て、他の一個一個撲殺して、皮剝ぐを見れば、誰が相距る甚だ遠きに驚き、彼の甚だ優りて、此の甚だ劣れるを念はざらん。既に一私人たるカーネギーの製鐵場を一覽せる者、後に及びてクルップ式武器製造場を見るとも、亦驚く事なかるべし。費府のボルドキン車輪製造場を一覽すれば、以て其雄大なるを想ふに足るべく、一たびブルックリン橋上に立ちて眺望するも、亦如何に機械の世界なるかを判知するを得べし。其他淨水と熱湯との供給の遍く行き亙れる、アイスクリームの、大なる製造會社より刻々配達せらるゝ等、百般の供給一として意の如くならざるなき、總じて物質的進歩の高潮に達せるを想見せしむるものならざるはなし。

物質的進歩高潮に達す

顧みて歐洲の大都會に於て見る所を以て比較するに、何れも小規模にして、一般に靜寂なりといふべし。倫敦の煤煙は有名なりと雖も、米國大都會の煤煙に慣れたる目には、特に不思議とせられず。況や其他の都市に於てをや。米のエレヴェートルの昇降極めて速にして、歐のリフトの緩漫なるにても、亦之を推知すべし。米には大學及び專門學校の數合して六百以

緩漫

上、財産の總額七億圓、一年間の收入は四百萬圓を超え、年々集まる所の寄附金、少きも尚數百萬圓を下らず、多きは即ち數千萬圓を出で、學生の總數實に十五萬人と稱す。新聞發行の多き、遙に歐洲諸國の上にあり。中には一日の間に發行すること前後九回なるあれば、各日曜毎に色刷百頁に近きを發行するあり。要するに斯る類の事は他の何地に於ても見るべからざる所にして、たゞ獨り米國に於てのみ見るを得べきものとす。而して米人は觀光者の他國より來るものあるに會するや、即ちまづ「驚くべき國たるを察せ

觀光

しならん」と語るを常とす。

（三宅雄次郎、一塊、一塵）

六　沙漠の月

船は五時に蘇士運河に入りぬ。その幅は一樣ならねど、狹き所も百メートルには餘るべし、浮標燈臺など種々の標識絶間無く立ち並びて、船の進行に便にしあれど、其狹きところに至る毎に、汽力を出來得る限り緩くして、徐々と進む程に、兎角して日はナイル三稜州の一部に落ちぬ。見る限の荒野は漠として人の跡なく、折節は痩せたる草の、浮埃雲の如く、夕陽の光

標識

も爲に黄なる中に、淋しく殘れるも哀れに、東は一帶の沙漠遠く連りて、茫々數十里、丘陵の逶迤たる黄褐色の土質、夕の風に紅塵を揚げて、小草芊々たり。折から遠き彼方の坤底より物一つこそ現れけれ。その物の頭を見すると齊しく、沙漠の果は緑に色づきて、土人の家の二つ三つも黑き影を地に落しぬ。

われと姉崎君とは甲板に立ちたりしが、一齊同音に月なり月なりと叫べば、傍に在りたる埃及パシャの子の、籐椅子を離れて立上りながら、故山の月を見る目の嬉しさは、眉宇の間にあらはれたり。我等は九萬

逶迤 イタ
芊々 センセン
坤底 コン 地ノソコ
パシャ ヤリ王
眉宇の間

の鵬程を航してこの千里の沙漠に明月を見る、其感如何ばかりぞ。月は狡兎の駈けるが如く昇りたり。その色の黄にして、紅を含みたる、下界の浮埃に汚されてなり。大さ八九尺もあらんか、段一段地を離るゝに隨ひて光明澄みて白く、野は紫に見えて近き丘のみ黑く峙つ中を、一隊の土人の駱駝に跨りて、月に遲れつ、運河に沿うて雲の行方を趁ふ態の奇なる、荒涼凄慘の景ながら、また何となく雄渾の觀あるを覺えき。夜は更くる程に、途中一二の船に行き遭ひぬ。苦湖といふ鏡の如き水面に出づれば、漸くに汽力を增せる

鵬程 ホウテイ 遠ク遠ク
狡兎 コウト 逃ゲ走ル
段一段
趁ふ 追フ
荒涼
雄渾 ユウコンナ

船の搖ぎに驚きて、立つ水鳥の名を何よと問ふに、ペリカン鳥と答ふ。第二の湖水をチムサクといふ。月は天心にありて、夜はいたく更けたり。乘客の多くは食堂に入りて、カルタの遊に夜の短かきを喞つとき、われは姉崎君とたゞ二人、舷頭に映つる影の淋しきを愛して、漫々たる湖中に泛びたる船の上に、滿身の白露、戎衣の袖を霑すをも忘れて、月中の仙となりぬ。姉崎君、先づ古人の詩の中に就きて、尤も今夜の清興に似たるものを取れば、彼の誰やらの七絶に、「西の方馬を躍らして、天に到らんと欲す。家を出でてより兩回

月の圓なるを見る。識らず今宵何の處にか宿せん。平沙萬里人烟を絶つ。」とは、實にかゝる沙漠の中に行き暮れたる旅人の心なるべく、嗚呼この雲もあらぬ月の中より、思ひ出すべき種も無き水の上に居て、而かも故郷を憶ふの心切なるは如何といふ。一盞の葡萄酒は卓の上にあれども、清風秋よりも冷かにして、醉を呼ぶに由無きを憾みとするのみ。われも安樂椅子に凭りて、「月横大空千里明。風搖金波遠有聲。」の詩など高吟して、イスメリアの小市も、何時の間に過ぎけむ、その近きに一宇の壯屋の聳ゆるは、この滿目荒涼の

一點紅

景中、一點紅の趣ある面白しなど語りて、わが前を通り行ける水夫に問へば、彼は埃及王が夏の離宮なりと答へぬ。

（大橋乙羽、歐山米水）

七　笑話二則

一　ペンシルバニア

我國に駐れる米人の、朝疾く逢ひたる人に、お早うといふべき挨拶のうろ覺なるが、おもひあやまれりとも知らず、澄し顔に「ペンシルバニア。」これはオハイオと相隣れる州の名なればなり。

うろ覺
澄し顔

絶えて久しき
ふと忘る

唐突失笑
ありしやに覺ゆ
手がゝり

二　横濱尾上町

「絶えて久しき知人の横濱にありときゝて、これより尋ね行かんとおもひしに、今ふと町名を忘れたり。知り給はずや。」と、五十許なる女の賤しとも見えぬが、汽車の中にて問ひぬ。唐突なれば、一旦はどつと人の失笑せしが、やがて「百人一首にありしやに覺ゆ。」といふに、稍、手がゝりありと、答は八方より出でたれど、皆當らず。隅なる若者の、最前より、「猿丸大夫奥山に」など口の裡に繰り返し居たるが、暫くして「前中納言匡房、うん、それは高砂町でせう。」といへば、首傾けたる老女の

忽ち躍り上りて「有難うございます。其次の尾上町でした。」

（齋藤綠雨、あられ酒）

八　人

通有性

人と云ふのは、固より日本人ばかりではありません。アジアの住民ばかりでもありません。イギリス人でも、フランス人でも、アメリカ土人でも、總べて人と云ふ名の中に含まれて居ります。若しも日本人のみを人と云ふのならば、日本人の通有性が取りも直さず人の通有性で、頭髮が眞直で黑いとか、眼の虹彩が黑

黑み勝

種族的性質

み勝の褐色であるとか云ふことも、人の性質として數へあげられる譯であります。併し事實に於ては、人の中に日本人で無い者が澤山あり、隨つて頭髮の縮れた者や、虹彩の鼠色の者、其他種々體格上の性質を異にした者があるので、かく異同の有る點は、勿論人の通有性と認める事は出來ません。

諸地方住民中に存する種族的性質を引き去つて、眞に人類普通の特徴と云ふべきものを探つて見ますと、先第一に人類の身體は、明瞭に區分された頭と、胴と、二本の手と、二本の足とで成り立つて居る。（かくの

類人猿

常態

如き事は人類以外の者に於ては決して見ません。）

次に人類の足の拇指は、手に於けると大に趣を異にして、其長さが隣の指と殆ど同じである。（類人猿即ちオラングータンやゴリラの如く人に好く似た大猿に在つても、後肢の拇指は前肢の拇指と等しく、人類の手に於けると同様に、隣の指よりも短くなつて居ります。）

次に人類は進行に際して、後肢即ち二本の足で歩行するを常とする。（類人猿中にも後肢で立つて歩行し得る者もありますが、それは決して常態ではありませ

ん。）

此他頭に毛が生えて居るとか、目が二つ有るとか、口の中に舌が有るとか云ふ様な事を述べたならば、人類の通有性と云ふものは殆ど際限が有りませんが、斯様な事は人類の通有性たるに止まらず、類人猿との通有性であります。否一般獸との通有性であります。一對の目を有すると云ふが如きに至つては、鳥にも魚にも通ずる事であつて、人類の特徴とは云はれません。眞に人類普通であつて、しかも人類特有たる所の體格上の性質は、前に掲げました數ヶ條に過ぎ

ません。

（坪井正五郎、人類談）

生活現象根本的

九　人體の生活現象

生れるから死ぬまでの生活現象を見ても、人間と犬猫との間には、根本的に違つた點は一つもない。生まれると直に母の乳を飲んで生長し、日々空氣を呼吸し、食物を食うて生活すること、老年になれば弱つて死んで仕舞ふことなどは、人間でも、犬猫でも全く同じである。

なほ詳に調べて、呼吸の作用、消化の作用等を比較して見れば、益々相似る度が著しくなる。同一の構造を有する器官を以て同一の作用を行うて居るのであるから、外界に對する關係は、人間も犬猫も畧、同樣で、

空氣稀薄

空氣が稀薄になれば、人も犬猫も共に窒息し、水中に落ちれば、人も犬猫も一所に溺れて仕舞ふ。其他身體に水分が不足すれば渴を覺え、滋養分が不足すれば饑を感じて、水と食物とを得なければ辛抱の出來ぬことなども、人と犬猫との間に少しも相違は無い。

豫備學科

生理學は通常醫學の豫備學科としてある故、生理學の目的は、主として人間の生活現象を詳にすること

であるが、今日生理學者の研究の材料には、人間よりは猫、兎等の如き獸類の方が遙に多く用ゐられて居る。特に筋肉、神經等の研究には、蛙を用ゐるが常である。蛙の大腦で試驗したこと、鳩の小腦で研究したことなどを、其儘人間に應用して差支のない所を見れば、人間も、此等の動物も、生活作用の大體に於ては全く相等しいものと見做さねばならぬ。

試に人體生理學と題する書物を開いて見るに、其中に直接に人體について行うた研究の掲げてあることは甚だ少く、脈の搏ち樣とか、小便の分析とか、又は

皮膚の感覺とかいふ位な、身體に傷を附けずに出來る事項ばかりで、其他は總べて犬、猫、兎、モルモットなどについて行うた實驗に基づくことであるが、斯樣な生理學書が常に醫學校で用ゐられ、十分に役に立つて居ることは、人間と犬猫等との間に、生活現象上、何の相違もない確な證據である。

又病理學、黴菌學、藥物學等でも、常に犬猫の如き獸類を用ゐて研究して居るが、其目的とする所は、素より藥物、黴菌等の人間に對する效力を確めるにある故、若し人間と犬猫との體質に根本的の相違があるも

のならば、總べて無益な筈である。然るに實際に於ては、斯樣な獸類について行うた研究の結果を人間に應用すれば、皆立派に功を奏して、近來は其ため種々の病氣を豫防的に治療することが出來る樣になつたことなどは、確に人間と犬猫とは體質に於ても決して著しい相違がないといふ證據である。

鼠捕藥を誤つて飲んだために人が死んだこと、人を殺すために盛つた毒藥を犬に食はせたため、犬が直に死んだといふことなどは、誰も屢聞くことであるが、特に可笑しいのは獸類に對する酒精の働である。

陽氣に浮かれ出す

或人が猿に酒を飲ませた所が、醉の廻るに隨うて陽氣に浮かれ出した具合から、歩行が不確になつて、左右へよろつき、終に倒れて寢て仕舞うて、翌日は兩手で頭を抑へて頭痛を堪へて居る所まで、少しも人間と違ふことはなかつた。唯違ふのは、此猿は其後如何にしても決して酒を飲まなかつたといふことである。

（丘淺次郎、進化論講話）

一〇　臺灣人の風俗

臺灣の土蕃に熟蕃といふと生蕃といふとあり。熟蕃

風化

とは久しく支那の風化を受けて、衣食住なども聊か進歩したる者をいひ、生蕃とは未開の野蠻人をいふ。今その蕃族について一二の事をいはん。

生蕃の中にバイワン種族といふは、最も古く住せる蕃民にして、體幹長大に顏面銅色を帶びて、其性殘忍なり。怒るときはその身を忘れて生命をも顧ざるに至る。常に高山の絶頂に住み、衣服は布の類の膝掛に似たる物をもて前後より胸と背とに當て、更に鹿皮をもて、其上を被へり。

この蕃人の殘酷なるは、毎歳秋季に行ふ人頭祭をも

部落

展覽會

精悍

軀幹

いゝだちたる

て推知すべし。人頭祭とは、部落中の各所より髑髏を齎し來て、一場の展覽會を開くことにて、髑髏の多少に由りて優劣をも定めて、優等者には賞與をも行ふ事ありといふ。明治七年臺灣征討の時、精悍の聞えありし牡丹社といふも、この種族なり。

又デボン種族といふは、軀幹バイワン種族よりは短小にして、その性もバイワン種族よりは溫和なり。衣服は脚絆と胸當とのみにて、寒冷の候には牛皮を其上に被ふ。但しこの種族の酋長は、手腕及び手甲、手指などに入墨をして、儀式だちたる當日などには、花毛

氈の類にて作りたる長衣を着す。

この種族は專ら農耕をつとめ、又漁獵にも從事して、鐵工、銀工などの職業を營めるものあり。

生蕃の爭鬪は、多くは深林の中にて、豫め使者をもて期日と場所とを定め置き、當日に至れば、双方より五六尺許なる竹竿の末に、五六寸許なる槍の穗をすげたるを横たへ、又鐵欄木質の二尺許なる反身の刀を提げ出でゝ、石を飛ばし、箭を放ち、入り亂れて散々に鬪ひつゝ、漸く日暮に至る時は、双方死傷を數へて勝敗を決するにて、死者多きは敗となり、少きは勝となりて、敗者は勝者に償物を出して和解すといふ。

漁獵又は農耕に從事する東海岸の諸部落にては、蕃人の家屋處々に散在せりといへども、周圍に牆壁を築く等の事なし。但し南部の山中に住める蕃人及びデボン種族等は、家屋を一圍して壘壁の如きものを築き、周圍に樹林又は竹籔などを繞して、他族の來襲に備へたり。又かの牡丹社の如きは、海面より高きこと四千尺許なる山中に部落を設け、險しき巖石の上を通路として、その近傍には、豫て巨木大石の類を積めり。敵の來襲に備へたるにて、敵若し來る時は、轉下

輕捷猿猴の如し

して防禦せんの意なり。この種族の巖石の上を走るは、常人の平地を行くよりも疾くして、その動作の輕捷なること殆ど猿猴の如し。

すべて蕃人は物の迷深くして、夜半に犬の遠吠するを聞く時は、家内に死者ありとして、僧を請じて祈禱し、又旅行する途中にてくさめする事ある時は、凶事ある兆なりとして、既にその地に達せんまでに行きたる時にても、行くを止めて家に歸るといふ。

（物集高見、中等國語漢文讀本より）

結晶

一一　樟腦

樟腦は本邦の特産にして、我國の重要なる輸出品の一なり。産地は臺灣を第一とし、その他、和歌山縣、四國及び九州の暖地にも之を産す。明治三十五年に我國より海外に輸出せし總額は、實に三百四萬斤以上に及べりといふ。

樟腦は樟の幹、根、枝、葉より取りたる物質にて、白色の結晶をなし、一種の芳香あり。その種類に上枯、中枯、山方、再製等の四樟腦あり。上枯と中枯とはよく乾燥したる上等品にて、山方とは産地より出したる儘の普

通品なり。再製とは大阪、神戸、横濱等にて樟腦油より分離せしめたるものなり。歐米諸國に輸出するは此山方及び再製の二種とす。製法はまづ蒸餾釜と冷却釜とを備へ、蒸餾釜には水を盛り、上に一箇の桶を据ゑて、其桶中には樟樹の細にしたるを入れ、釜を熱して蒸氣を其桶中に充し、さて後之を桶の上側方に附けたる竹管より冷却器に移せば、蒸氣中に含まれたる樟腦は冷却して水面に浮ぶ。これを凝固せしむれば山方樟腦を得べし。此法は最も善良なるものなれど、地方によりては多少の差異あるを免れず。

樟腦の効用は頗る廣く、香料、防臭劑、及び醫藥等として用ゐ、近來無煙火藥、セルロイド等の製造にも用ゐらる。

一二　森

かたみに

かたみに上にいでんとて、
爭ひたてる高き木の、
天つ光を身にうけて、
ゐみほこりたる下かげに、
惠にもれて今もかも、

今もかも

枯れんとすなる

枯れんとすなる小草あり。
繁きさはりにさへられて、
人に知られぬ梢あり。

〻〻〻をよそに

あらしの風をよそにして、
靜にねぶる老木あり。

あだし梢

あだし梢にやどり木の、

時得顔

時得顔にもにほふあり。

われと〻〻なみ

われとのぼらん力なみ、
よそにかゝれるかつらあり。
しづけき森の草木すら、

憂き世

猶憂き世にはもれずして。

（佐々木信綱、春風秋水）

一三　森林の功用

吾人の住居する家屋は木造なり。家屋中の諸造作、戸障子、唐紙の類も亦木にて作り、障子、唐紙等は木の纖維より造れる紙にて張る。座敷、書齋、臺所の別なく、諸道具の木にて作れるものを擧げ來らば、其數如何に多かるべき。薪炭の山林よりいづるはいふまでもなく、石炭は古代の森林の久しく地中に埋沒したるも

負ふ所大なりと謂ふべし

緩和

のなり。薪、炭、石炭なくんば、吾人は何によりて食物を調理し、何によりて冬夜の寒を防ぐべき。人生の森林に負ふ所亦大なりと謂ふべし。

森林ある所は空氣常に清淨なり。これ植物は動物の酸素を吸入して炭酸瓦斯を呼出するに反し、炭酸瓦斯を吸收して酸素を放散するを以てなり。しかのみならず、森林は水蒸氣を含むこと多きを以て、又氣候を緩和する效あり。森林は人生の健康の爲にも缺くべからざるものなり。

森林の必要かくの如くなれば、文明國に於ては大に

策を講ず

自然の結果

點々滴々

氾濫の憂

之を保護し、樹木の養成に務む。蓋し樹木の生長は徐徐たるものにして、伐り仆すは一朝の事なり。濫りに山林を伐り仆して養成の策を講ぜざる時は、忽ち樹木の缺乏を感ずるに至るは自然の結果なればなり。」

山林濫伐の恐るべきは、洪水の災を免れざるに在り。雨の降るや、樹木の葉より葉に傳り、點々滴々地に落ちて苔を濕ほし、徐々として溪流に流れ落つるを以て、大雨の時といへども氾濫の憂なけれども、樹木なき禿山に於ては、直に奔下して溪に入り、川に流るゝを以て、下流に臨める村落は、忽ち洪水の災害を受く

我國山林保護の事は農商務省の司る所にして、全國に十の大林區署、二百七十の小林區署あり。林務官ありて其事業を掌る。

一四　植物の感覺

植物の體の一部分が運動する例は色々ある。例へば合歡などは日が暮れると、葉が互に合して閉ぢ、朝になると、復開いて來る。斯樣に夜間は眠るやうな有樣になるから、ねむといふ名が附いて居る。尤も此木に限らず、外にも夜葉が閉ぢて朝開くものは澤山ある。

かの蒲公英の花を見ても、朝は開いて居るが、夜は必ず閉ぢて仕舞ふ。

色々の植物の細い卷鬚を見ると、此にも亦著しい現象がある。例へば葡萄の卷鬚、胡瓜の卷鬚、蕃南瓜の卷鬚、西蕃蓮の卷鬚などは、細い絲の樣な形をして居るもので、今其尖に觸れると、暫くの間に卷いて來る。其時に小さい固形體、例へば極細い棒か、又は枝の如きものが其傍にあると、直にそれに卷き著く。卷鬚が極僅かの觸接に依つて卷き著くことは、最も著しい現象であるが、尤も是は卷鬚の種類によつて、自ら鋭敏

なものと、遲鈍なものとある。感覺の鋭いものでは、細い毛や、又細い絹絲のやうなものを其上に懸けても、ぢきに屈曲を起す。かの西蕃蓮の卷鬚などは、最も感覺の強いもの〻一例である。

茲に又前に述べたるものとは別種であるが、やはり植物體の感覺に就ての現象がある。今試に豌豆、蠶豆のやうな豆の芽生の極若いものを採つて、其眞直な細い根を傷つけぬやうに、又乾かぬやうにして、豆の處を針で木栓（コルク）に挿し止めて、さうして根の先を地平の方向に置くと、數時間又は數十時間の後には、根の

先が必ず下へ曲つて來て、地球の中心の方へ屈折する。それから又若芽の先の方は根と反對で、段段に上の方へ向つて來る。又今度は別の實驗をして見よう例へば薺（なづな）、蕓薹（あぶらな）或は蕪菁などの種子を蒔いて、其若芽が澤山に出たのを窓の前へ出して置くと、若芽の尖が一兩日後には、必ず明るい方へ向つて屈曲する。

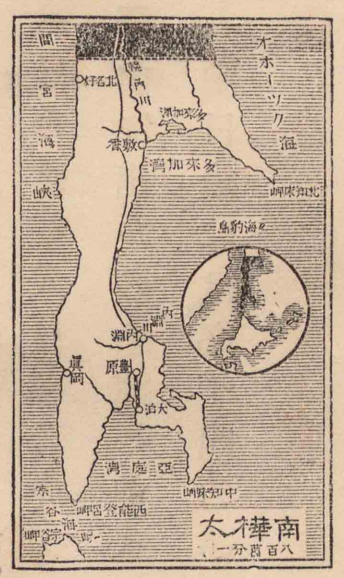
（三好學、植物の感覺）

一五　樺太

樺太島の面積は凡そ四千八百三十八方里にて、我北

經營

海道よりも稍、大なる一島に御座候。日露平和條約にて、北緯五十度以南我國の新領地と相成候以來、樺太總督府の施設著々歩を進め候事御承知の通りの次第に御座候。



島内は到る處樹木鬱蒼として、全面積の三分の二は殆ど森林に蔽はれ居候。尤も山腹又は沼澤地等にて寒風の吹き荒るゝ所は、苔蒸したる樹木のまばらに生ずるのみにて、誠に荒涼たる有樣に御座候へども、四方山を繞らせる平地に於ては、百五十尺もある大木、參差として天を衝き、壯觀此上無き事に御座候。南部樺太には樅、檜等最も多く、白楊、柳、楡、瑞西松、山欅等も尠からぬ樣見受申候。

參差

森林中には熊、狐多く住み、其皮は馴鹿、黑貂、水獺等などの皮とともに輸出物の重要なるものに御座候。

專門の技師

島内の礦業にて見込あるものは、石炭にて良好なる石油礦も所在認めらるゝ由に候へば、尙專門の技師追々調査いたし候はゞ、國家の一富源と可相成と存候。

世界に冠たり

見渡す限り

財源

沍寒

本島産業の重要なるものは漁業にて、魚類の多きことは世界に冠たりと申すことに御座候。鰊、鮭、鱒、鱈等其重なるものにて、目下盛に漁獵せらるゝものは、鰊、鮭、鱒の三種に御座候。鰊の群集し來る時は、見渡す限りの海面銀色と成り、一偉觀を呈し候。鰊は南方の海程漁獲多く、鮭は之に反して北方に多く、南方に少き由に御座候。鱒の盛に取るゝ時は、食鹽缺乏して鹽漬に出來かぬる程の盛況を呈し候。この外昆布も多く海驢、海豹、腽肭獸、鯨など、皆重要なる一財源に有之候。」氣候は緯度の割合には寒けれども、沍寒住むに堪へずといふ程には無之候。此外尙土人の風俗等に就ても申上度事は澤山有之候へども、又次の便に可申上候。謹言。

通路の衝に當る所

一六　鷲狩

十一月の初頃から、二月末頃迄の間、北西の風さへ吹けば、必ず多少の鷲は勘察加の方から千島へ飛んで渡つて來る。そして其來る道は、年々殆ど一定して居ると云つても宜しい位である。そこで其通路の衝に當るところへ庵と呼び習はしてゐる隱れ家を作つ

て、其中に銃を以て忍んで居て、渡つて來る鳥を擊つのが、まづ普通の獵法である。時には數百羽の鷲が渡る事も無いでは無いので、獵運の好い折は、十五六羽も庵の上へ來る。それを苦なしに打ち止め得ることもある。

鷲にも數種ある。內地では大鳥だの、白尾だの、糟尾だのといふ分類があるが、實際に鷲を多く獲る我々の方では、まづ第一にテッカといふのを主なるものとする。雪のやうに白い尾で、黑い翼で、肩の處に眞白の羽を重ねて居る鳥だ。飛んで來る時は恰も蛇目傘を

もんどりを切つて（サカサマ）

開いたやうなので、或は名づけて蛇目傘鷲とも云ふ。この鷲は翼を張れば、七尺以上もある。

羽翮は强くつて中々獲（と）り難い。此奴は翼骨を擊ち折られて、もんどりを切つて地に落ちても、容易に人を寄せ附けは仕無い。肩を聳かし、爪を擴げて、人が寄つたら一攫と、近づくものゝ動作に目も離さず睨んで猛り狂ふ。其勇氣といふものは、一通りでなく凄まじいであるから或人は會、油斷をして、胸のあたりを攫まれて、さうして嘴を以て目鼻を突かうと、隙間も無く寄り附かれた時、必死になつて、辛うじて、其頸筋を

時の十分間格闘

鰒隙

おさへて、終に勇を振つて締め殺しは締め殺したけれど、時の十分間位は、この猛鳥と人間と、惡烈な格闘をしたことがある。其時幸にして爪が身に達かないで、厚く着て居た衣服だけに止つたので宜かつたが若し衣服が薄くつて肌膚へ貫いて、肋骨の鰒隙などへ攫み刺されたものなら、容易ならぬ負傷をさせられた譯であつた。

さてこの鷲狩は、極北の千島のしかも最も寒い時の事であるから、擊ち落すや否や、庵を飛び出して、手早く一棒を喰はせて、肩にして歸るのだが、もう其時鬚

勞を醫す

髯に氣息のかゝつた處は、凍つて銀の線の如くになり、眉毛の端からも氷が下つて、白毛の如く見え、最も甚だしく寒い時は、睫毛の端まで凍つて、殆ど前面の見え難くなる事すらある。庵に歸つてから、最も價のする毛羽を拔き取つて箱に納め、次に兩翼を剪り取つて後は、肉は夜食の料として、差當り其日の勞を醫するのであるが、實に內地の雉子獵や鴨獵などゝは違つて、また一種の趣のある面白い獵である。

（幸田露伴）

物のね
えびす

一七　蘇武

蘇武ハ文卿、杜陵人、前漢ノ時代ニ孝武皇帝ノ命ヲ受ケ匈奴ニ使スル時ニ天漢元年ニシテ我国紀元五百六十一年開化元年ニ当ル、帰国ノ時ニ天漢元年ニシテ紀元五百六十一年開化元年ニ当ル

風颯々の秋ふけて、
ふき飜す旅ごろも、
おもき君命いたゞきて、
遠く匈奴の國に入る。
野邊の草木や、鳥の聲、
聞く物の音も、見る色も、
いづれかえびすのものならぬ、
思へば遠く來つるかな。

匈奴ハ支那北狄ノ一ニシテトルコ人種。秦漢ノ世最盛ニ内外蒙古ヲ領有ス後南北ニ分レ南匈奴ハ降リ長城内ニ移住シ北匈奴後漢ノ竇憲ニ破ラレ遠ク西方ニ走ル

草枕

流れ行く水音たてゝ、
胸に愁の波高し。
故郷母あり雁鳴きて、
老の寝覺やいかならん。
よしや幾夜の草枕、
旅寝の空に果つとても、
國家の爲に盡くすべし、
君命重く身は輕し。
かうと覺悟は定まりぬ。

つぶさに

使命つぶさに傳へつゝ、

國書

匈奴の王に面接し、

蘇武は國書を呈しけり。

もとより非道の王なれば、

國書の旨意は聽かざれど、

單身敵地に使せし、

蘇武が勇氣を惜みつゝ、

ある時蘇武を召しよせて、

しかあらば

「降り仕へよ。しかあらば、

重く汝を用ゐん。」と、

說き諭せども聽かざれば、

國王大に怒をなし、

蘇武をとらへて荒山の、

いはやの中に幽閉し、

食を與へず苦しむる。

寒さ膚をつんざく

頃しも北風雪を吹き、

寒さ膚をつんざけり。

飢うれば枯草を雪に和し、

無念

いのちを繫ぐ料となす。

日數經れども死せざれば、
えびす等怪しみ且怖れ、
こたびは蘇武を野に移し、
羊のむれをばまもらせて、
「雄羊孕むことあらば、
放免せん。」とあざけりぬ。
覺悟はしても無念さに、
ねむれぬ夜も幾たびか。

もなか

一夜雲なく月すみて、
秋ももなかの空の色、
せめてはかくて在ることをと、
雁に託せし筆の跡。
かくて春去り夏來り、
又秋の風、冬の霜、
落葉〳〵の重りて、
十有九年夢の間や。

老いて屈せぬ忠節を、
天助けてか不思議にも、
雁の使のかひありて、
樂しきたより聞えたり。
國と國との和議成りて、
蘇武は赦され歸りしが、
立ちいでし時の黑髮は、
いつしか雪とぞなれりける。

（坪内雄藏、國語讀本）

一八　東宮殿下の御逸話

わが東宮殿下のかしこくも、天皇陛下の聰明に似させたまひて、御克己の德に富ませたまへることは、承りまつるごとに、いとゞ忝くこそ覺ゆれ。

殿下御年いまだ七つ八つと數へ奉るころ、御附武官として某老大佐保育の大任を承れるが、ある年の冬、霜いと深く、寒風身にしむ朝なりき。大佐は例によりて、曉ふかう參内したり。未だ夜も明けざれば、宮中にても煖爐の煙もたてず、たゞ宿直の仕人、眠たげなる目に、小さき火鉢を打守りて、曉の寒さをかこち居る

のみ。大佐のいと早く參内したるを見て、仕人はいそぎ、おのが火鉢をさし出して、この頃の寒天の話などす。

程なく殿下御起床後の諸準備も整ひしかば、大佐は心やゝ落ち附き、かの火鉢を友に、時の到るを待ちをりしが、けさの寒さたゞ身を切るやうにて、如何ともしがたし。さては攻城野戰の時寒氣の凛烈たるに逢ひて、あるは焚火し、あるは俗に云ふ跨火などせし習慣思ひ出すともなく胸にうかび、その小火鉢を足もとに引きよせつゝ御日記類を見つめゐたり。

程ゝする

最敬禮

やう〳〵曙近くならんとする程、ゴトンと音せさせて、扉をあけて入り來るものあり。大佐はかの仕人にやと後向きもせず、一心にかの御日記を讀み居たりしに、突然「大佐」といふ聲ひゞきぬ。大佐はその聲音の幼く鋭く威嚴あるに、いかで身もをのゝかざらん。直に突つ立ち、向き直り、「殿下、御機嫌麗しくあられます。」と言上しつゝ、最敬禮を行ひぬ。殿下は微笑を含ませられ、輕くうなづかせられ、「大佐寒いのう。」と宣ひぬ、大佐は直にしか奉答すべきを、おのれ軍人として保育の大任にあたりまつる身、かろ〴〵しく答へ申すべ

おごそか
口にする
目送
慎獨の德
言行均しからず

きにあらずと思ひ、かの火鉢の事もわすれて、最もおごそかに「どういたしまして、軍人は寒い熱いなどといふ事は、決して口にするものではござりませぬ。」と憚る所なく申し上げたり。

殿下は暫しあたりを見たまひしが、何事も仰せられず、たゞ「左様か」といと輕く宣ひて、やがて奥へ入らせたまひぬ。御後影の見ゆる限り、目送し奉りて、本の席にかへりしが、さて見れば、かのわが跨火にせし小火鉢は、依然としてそこに存在せり。大佐はその慎獨の德を缺きて、言行均しからざることを奉答したるを

かしこみ
輔弼の任
ものする

深く悔いて、かしこみ居たり。

紺天鵞絨の兵卒風の服裝して、學習院教場の一隅に多くの學生と共に熱心に講義をきゝたまへるは、今朝大佐をおどろかしたまひし殿下なり。その御側に侍立して、常に輔弼の任をおへるは御附武官の中尉某なり。けふの寒さ殊に烈しければ、竊に御身を氣づかひまつり、講義の濟むと共に、御座の下に、かねてものする火鉢をさし入れぬ。

殿下は何の御心もなく、書を讀みふけりたまひしが、やうゝ御足元の暖なるに氣づかせたまひ、中尉を

凛乎

御氣色たゞならず

原因探究

めして、凛乎としたる御けしきにて、「中尉、軍人たるものは、寒いの熱いのと云ふことはないものだ。この火鉢はいらぬ。早く持ちゆけ。」と宣へり。中尉は驚き畏み、常に變れる御氣色のたゞならぬに、何事も申し上げず。謹んで仰に隨ひ、その火鉢を取り除きたり。

さはれ如何なる御感動にて、かく賢く貴き思召にならせたまひしかと、中尉は殆どその原因探究に心を注ぎぬ。

けふは朝より降りつゞく雪止む事なく、滿都一尺有餘の堆積を見るに至りぬ。

還啓

身の措き處なし

殿下は御課業了らせられて、雪中に還啓あらせられぬ。中尉はその陪乘中も、深くかの御詞の身にしみて御前をさがりて後、直に事のよしをかの老大佐に告げ、その賢くおはす旨をくりかへし語りたり。大佐は暫しきゝゐたりしが、思はず直立して、「あゝ恐多い、恐多い。」と、涙をこぼして打萎れぬ。中尉怪しみて事の旨を問へば、さきにありし事を隈なく話し、「不肖保育の大職を奉じながら、わが不德のために、反つて殿下より躬行實踐の御訓戒を賜はること、實に身の措き處なし。この上はたゞ謹愼して、將來を戒むるに在り。」と

其筋進退伺

朴直

急ぎ殿下の御前に至り、再拜して今朝の過を謝し奉り、やがて退いて、其筋に進退伺を差し出し、閉門謹慎罪を待つ。此事いつとなく九重の奥に達しければ、陛下には反つて大佐が朴直誠實なる精神を愛せられ、いよ〳〵殿下保育の事を厚く任じたまふに至れりといふ。

そも〳〵人生れて七八歳は、僅に父母の懷を離るゝに過ぎず。殿下はかしこくも御身體あまり御健康にわたらせたまはずと承るに、かの老大佐が言行の合一せざりしをば咎め給はで、御身みづからその採るべきを採らせ給ひて、實踐し給ひしこと、いかにかしこく貴き御心ならん。御克己の德に富ませ給へることとかくの如き、天下いづくにかかゝる君はおはします。我々國民は世界無類の御國體の下に生れて、叡聖文武なる天皇陛下を戴き、又聰明鋭敏なる東宮殿下を戴き奉ること、いかなる幸福ぞや。務めざるべけんや。勵まざるべけんや。

叡聖文武

（天町桂月、中學世界より）

一九　サンスシーの宮

ポツダムは伯林の西南六里にあり。巴里のヱルサイ

ユといふが如く、普魯西王家の離宮の地にして、又政治上の要地たり。町の宮、莫愁宮、新宮等の宮殿あり。また莫愁園といへるいと廣らかなる宮苑あり。宮苑はやがて公園にして、宮殿は例の木戸錢とりて、内外人を問はず縱覽せしむ。その他山莊、寺觀等、中々に雅び（みや）たり。町の宮の門邊、街道の眞中に「王の木」といふあり。菩提樹の老木にて、昔フリイドリヒ大王、この木の下にて民の訴をなにくれとなく聽かせられたりとてこの名あり。

やがて

なにくれとなく

莫愁宮の由緒こそわけてめでたかりけれ。大王離宮

由緒めでたし

を營まれたるに、宮の西南に風車臺あり、宮城よりの眺にいかにも目ざはりなれば、王、あるじの農翁に取拂を命ぜらる。翁「この風車の、翁が爲に唯一の財産なること、たとへば陛下の爲に普魯西の全版圖あるがごとし。今もし陛下の普魯西を奪はんとするものあらんに、甘んじてそがせんまゝに任せたまはんや。」と憚げもなく申しゝかば、王は言下に悟りて、「いしくも聞えつるかな。翁の名は何とかいふ。」と仰あるに、「獨身ののんきなる性分を、里人綽名してのんき翁（莫愁翁）と申す。」と聞え上ぐれば、「いでわが城も今より翁の名

版圖

言下に悟る

いしくも

國の將に興らんとする必ず禎祥あり

君、相、將、罕なる知遇

をとりて、莫愁宮と名づくべし。」と仰あり。これこの宮の由緒なりと聞えたり。

まことや國の將に興らんとする、必ず禎祥あり。文王祁山の下に居り、積德累世以て周室を致し、新田氏孤忠を以て時利あらず、その末大に起るものを德川氏となす。普魯西今日の帝業、ウヰルヘルム、ビスマルク、モルトケ、君相將の世にも罕なる知遇によるといへども、抑も亦一日のわざならんや。（建部遯吾、西遊漫筆）

二〇　神社

由緒

神社は其社格によりて數多の種類に分たる。其最も高位にあるは神宮即ち伊勢の大廟たり。國家の大事ある毎に、天皇は必ず神宮に御奉告あらせ給ふ。神宮には祭主、宮司、禰宜等の職ありて、祭主は皇族之に當り給ふ。

次は官幣社にして、大中小の三階級あり。山城にては石清水の八幡、上下賀茂の社、松尾、平野、稻荷等、大和にては春日、大神、廣瀨、龍田等、出雲の大社、常陸の鹿島、下總の香取等はいづれも古來由緒ある神社にて、官幣の大社とす。明治五年別格官幣社と云ふものを定め

殉難

幣帛を捧ぐ

らる。別格官幣社の祭神は國家皇室の功臣にして、楠正成を祭れる湊川神社、新田義貞を祭れる藤島神社、楠正行の四條畷神社、藤原鎌足の談山神社、豐臣秀吉の豐國神社、德川家康の東照宮、又維新後の殉難戰死の士を祭れる靖國神社等の如き是なり。

國幣社は官幣社に次ぎ、一國が幣帛を捧ぐるの意にして、亦中社と小社とあり、鎌倉の鶴岡八幡、陸前の鹽竈神社、安藝の嚴島神社、讃岐の金刀比羅宮等は國幣中社たり。

下りては府社、縣社にして、府縣の人民之を祀り、鄕社

兩部神道

截然

神佛混淆

は鄕邑の產土神にして、一鄕若しくは數町村之を祭り、村社は一村の祭る所なり。

中古兩部神道の行はれしより、神佛の間漸く混雜を來し、神社に附屬せる寺院を建立して之を神宮寺または神宮院等と稱し、神社佛寺相並びて讀經祈禱を爲すに至れり。こゝに於てか神佛の間に截然たる區別をなし難かりしが、明治の初年神佛混淆を禁ぜしより、二者判然として別れたり。しかも尙混雜の跡を遺せるもの鮮からず。今なほ神社にして寺院の山門に類せるものを有し、寺院にして其境內に神を祀れ

清樸簡古

鎮護

るものあり。

國祖神武天皇を祀れるは橿原神宮にして、官幣大社に列し、また普通に知られたる太宰府の天滿宮は官幣中社なり。京都の平安神宮は桓武天皇を祭り、官幣大社に列し、その建築は他の清樸簡古なるとは異なりて、昔時の大極殿を模したるを以て、頗る華麗なり。臺灣神社は官幣大社にして、大國主命及び故北白川宮を祀り、以て新領土の鎮護と爲す。

二一　佛閣

名院巨刹

堂塔伽藍

欽明の御代佛教始めて渡來し、漸次隆盛となり、平安朝に至りて其極に達せしを以て、名院巨刹は今尚大和山城の間に多し、

大和の東大寺は巨大なる佛像即ち奈良の大佛を以て世に顯れ、法隆寺は最古の建築として、美術及び建築の點に於て國家の重寶たり。其他幾多の堂塔伽藍は、今に殘りて昔の繁榮を語る。

奈良七重七堂伽藍八重櫻　芭蕉

平安の朝に至り、最澄(傳教大師)、空海(弘法大師)の二高僧あり。一は比叡山に延曆寺を建てゝ天台宗を唱へ、

朝廷の御歸依
庶民の信仰
兵燹に罹る
蘭若廢墟に似たり

朝廷の御歸依厚く、一は高野山に金剛峯寺を剏めて眞言宗を說き、廣く庶民の信仰を維げり。延曆寺は幾度か兵燹に罹り、僅かに一部分の堂塔を殘し、高野山は蓮華八葉の靈場今に顯然たり。三井寺(即ち園城寺)は延曆寺と同じく天台宗の本山にして、琵琶湖に臨み、形勝の地區を占むと雖も、蘭若殆ど廢墟に似たり。

三井寺の門叩かばや今日の月　芭蕉

京都には禪宗の五山あり、天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺及び萬壽寺にして、南禪寺は別に一派を爲し、金閣寺及び銀閣寺は、建築と庭園とを以て世に名高く、足

夢と殘る
翠微
渴仰
題目

利時代の夢と殘れり。禪宗はいにしへ武門武士の歸依せるもの多かりしを以て、鎌倉にも五山あり。即ち建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺是なり。

法然上人が開ける淨土宗の巨刹は知恩院にして、東山翠微の間に其鐘聲を絕たず。眞宗は數多の派に分ると雖も、就中東西兩本願寺を以て其冠たる者と做し、共に下俗の地に在りて、民衆の渴仰を受く。

日蓮上人の遺跡は關東に多く、身延山の長久寺、池上の本門寺には法華の題目耳に聒し。

東京には有名なる淺草觀音あり。天台宗に屬し、其境

雜閙

内は公園となり、參詣遊覽の徒雜閙を極む。芝の增上寺及び小石川の傳通院は共に淨土宗にして、德川氏の建立に係ると雖も、是等の堂塔伽藍はいたく京都の名刹に劣れり。

遺鉢を傳ふ

藤澤の遊行寺は時宗の本山にして、其僧侶は常に全國を周遊遍歷し、遙に一遍上人の遺鉢を傳ふ。信州の善光寺は天台宗にして、「牛に引かれて善光寺詣り。」の傳說は長く人口に膾炙せり。

陽炎

陽炎や手に下駄はいて善光寺　一茶

二二　松雲禪師

專注

翻然として悟る

地方の人士東京に來らば、是非とも、一度は本所の五百羅漢寺を訪ひ給ふべし。東京の人士は之を東京の一名物と誇りて可なり。この五百羅漢は、實に古人が獨力にて、十餘年の年月にかけて、精力を專注したる苦心の痕跡なり。

この像をつくりたるは實に松雲禪師なり。松雲もと佛工の子、家業をつぎけるが、天性放逸にして、青年の頃家業にすさみ、悉く財產を失ふに及び、翻然として悟りて、鐵眼道光禪師の法弟となり、思ふ所ありて之

を其師にはかる。鐵眼大に之を賛成す。「もと佛工を業としたる身なれば、きざむことは難きにあらねど、一人にては五百といふ大數が氣がゝりなり」。「そのやうなる弱音吐かずに、一生の事業として著手して見よ。十日一體をきざまば、月に三體、年に三十六體、十四年餘りもかゝらば、完成すべきにあらずや」。「巨額の費用を要す。如何にしてか之を辨ぜむ」。「はゝはゝ、くよ〳〵思ふな。汝年なほ壯なり。刻苦すれば何事か成らざらむ。」かくて松雲益奮勵して、たけ一尺ばかりの羅漢像二つ作りて、之を示す。鐵眼見て笑つて曰く、「刻み方は

弱音を吐く

くよ〳〵

巧なれど、志小なり。何ぞ等身の像をつくらざる」。「お言葉は御尤千萬なり。されど言ふは易く行ふは難し」。なほど、難じて止まず。叱つて曰く、「土一升金一升の繁華の地なり。五百體が出來ずといふ筈なし。汝唯猛進せよ。」是に至りて、松雲志いよ〳〵かたし。さすがに鐵眼は松雲の師なり。

松雲が著手するまでにかく躊躇せしもげに宜なるかな。古來大美術はすべて官もしくは富者の保護に成る。松雲はまだ名もなく、一文も持たぬ貧僧なり。これが俗僧ならば、巧に權者を說きつけて、金を引き出

猛進

すべけれど、そのやうな俗僧の作は羅漢らしからで、俗物の面相になるべし。余は斷言す、官の保護以外營利以外に、この偉大なる美術を造りたるは、實に空前にして、或は絶後なるべし。

鐵牛道機禪師衣料をすてゝ、一體造立の資を給し、慧極道明禪師また給する所ありて、松雲の事業こゝにその端をひらき、淺草花川戸の陋屋に賃居して、一つ二つ造りあげたるが、前途遼遠なり。莫大なる費用を要す。晝は市街に出でて、五百羅漢造立を呼號して施主を求め、わづかばかりの金を得ては、歸り來りて、夜

前途遼遠

施主

は孤燈の下に佛像をきざむ。夏の夜は、數蚊群をなして來襲せしならむ。冬の夜は、寒風破窓をもれて、手も指もために龜せしならむ。春の花、秋の月もよそに、一心不亂、出でては錢を求め、入りては鑿を執る。一時、見聞するもの皆狂人と見なしたり。狂か、愚か、そは松雲の顧る所に非ず。唯、我が趣味とする所に就き、我が志す所を貫きて、五百羅漢を造るを得ば、我が能事畢れり。屈辱を忍び、貧苦と鬪ひて、脇目もふらず、その事に從ひける程に、其志に感じて、施主となるもの漸く多く、終には五代將軍の母なる桂昌院も有力なる施主

花を咲かす

となり、實に前後十有餘年を經て、元祿年間に五百羅漢の外に、なほ丈六の釋迦の拈華像、九尺の阿難像、八尺の文殊像、普賢像なども出來上れり。元祿の世には、さまゞの天才大才奇才出でて、各方面に花を咲かせたる時代なるが、松雲の事業もたしかに元祿の一の名花なり。一貧僧が獨力の結果といふことは、殊に異數とすべきなり。他の多くの羅漢の像は羅漢らしからで、盜賊の相多きに、こゝの羅漢にさる相なきは、作者の人格の高ければなるべし。

事將軍の耳に達し、本所に地をたまはる。松雲、假堂を

市閭

開山

建てゝ五百羅漢を安置しけるが、堂像と相應はず、大伽藍を造立せむとして果さずして死せり。象先禪師その跡をつぎ、像こそはきざまざれ、十餘年市閭に呼號すること松雲と同じく、終に一大伽藍を建立せり。松雲は功に居らず、鐵眼を開山とせり。象先も功に居らず、鐵眼を第一世とし、師の寶州を第二世とし、自から第三世となり、松雲を開基とせり。松雲と云ひ、象先と云ひ、いづれも賢なるかな。

（天町桂月、時代文範）

二三　日光の月夜

闇を衝きて白く流る

ほの見ゆる

雨後の長虹の如し

闇を衝きて白く流るゝ溪流の岸に沿ひて、眼前一帶の山の明るき空と相接したる處に、數樹の黑く林立したるを見つゝ、早已に男體、女峯の山腰近くまで照り渡りたる月光を顧みながら、二三の燈火のちらほらと樹間にほの見ゆる間を、一町程たどり行けば、一たび曲りて彼方の絶壁をのみ流れ行きたる大谷川の水は、再びわが脚下に注ぎ來りて、杉樹の小暗き間より、一帶の神橋雨後の長虹の如く夜色の微茫たる中に顯れ出でぬ。

迫りたる前岸一帶の山はやうやく盡きて、ひろ〻

水流ノ橋

潺湲として琴瑟を操つるが如し

と鉢石の田野に流れ落つる大谷川の下流には、月の光の陰翳もなく滿面に照りわたりたるさま、小暗き杉樹の間を通して、さながら夢の如く見え渡りぬ。されど我等の歩める處は、山影樹影深く蔽ひて、未だ些の月光の到れるを見ず。

月ののぼるに隨ひて、影は漸くその領分を狹めつゝ、神橋近く到りし頃には、已にその光の假橋の半桁を照したるを認めぬ。潺湲として琴瑟を操つるが如き激湍の末には、閃々たる月光巧みに錦を織り出せり。假橋の上にてわれ等は遂に月光に逢ひぬ。

狀すべき言語を知らず

月光と境を爭ふ

今まで影の中より光を見たる身は、更に光の中より影のおもしろさを見んとしつ。山影樹影の小暗き間を咽び來れる溪流の、目も眩むばかりなる月光の下に流れ行くさまのおもしろさ。我は殆ど狀すべき言葉を知らず。

山影樹影の月光と境を爭へるさまを見捨てゝ、橋を向ふへと渡り終れば、左に警察署、右に町役場を起點としたる日光の街は、滿面に月の光を帶びて、長く向ふへと走り下れり。瀧、殿堂などの大小の寫眞を美しく並べたる寫眞屋、大いなる火鉢を擁せる番頭の、人

軒をつらね甍を並ぶ

登臨の客

の過ぐる毎に「御泊んなさい。」と聲をかくる旅亭、塗物挽物などを並べたる椀屋、「名物やうかん」と記したる大なる札下げたる菓子屋などの軒をつらね甍を並べたる間を過ぎて、西洋書籍店の小僧のこくり〳〵と居眠せる前を、だら〳〵と向ふに下りつ。

左にのぼりて、觀音寺の門前なる杉樹の絶間を一歩一歩とたどり行きぬ。こはその上に一つの眺望臺ありて、四時登臨の客絶ゆることなき一勝地なるを知れる身の、この月の夜に、其處よりあたりの風景を望まばやと思ひたればなり。やがて今まで過ぎ來し杉

樹の列はいつか脚下になりて、其處に立ちたる廢寺の門前より望めば、月を帶びたる日光街の燈火は線を引きたる如くに連りて、その絶えたる末には、日光街道の杉並樹の逶迤として並び行く影、黑く微に見え渡れり。

一刷毛の霞

門を入りて尙少し登れば、やがて其處は眺望臺のある平地にて、三面渺々としてひらけ渡りたるさま、又譬ふべくもあらず。空は秋の夜の如く高く澄みて、月には一刷毛の霞のかゝれるもなく、物の影皆黑く明かに、空氣のさわやかなる、坐ろに人の精神に泌み入

龙大

月の光を隈取る

銀蛇の走るが如し

るを覺えしむ。殊に男體山の龙大なる姿は、黑く東照宮の杉樹の上に屹立して、それより左に靡きたる大眞名子、女峯、赤薙の諸峯の、月の光を隈取りてかすかにあらはれ出でたるさま、凛乎として我に迫り來るかと疑はる。大谷川は銀蛇の走るが如く、わが脚下を取り卷きて流れたり。

われ等は人も無き眺望臺に踞して、久しくなるまで月光の美しきと、水聲の幽なると、自然の靜なると、山影の淋しげなるとを見且聞きぬ。

（田山花袋、日光）

二四　江の島鎌倉

花につけ月につけ、まづ心のうかれ出づるは、江の島鎌倉の空なり。されば一年として遊ばぬことこそなけれ。

片瀬村うちすぎて、小坂一つ越ゆれば、江の島前にあり。にはかに眼の開けたる心地して、愉快かぎりなし。春はうすぎぬ引渡せるやうなる波の上に、白き點つけて、水鳥の逍遙するは、いとのどかなり。浮べる舟の遠きは、やう〳〵に消えゆくも畫の如し。右は大磯小田原より箱根のあたりも見ゆるに、富士は薄墨に面

逍遙

影のこしてぞ向はるゝ。左は三浦三崎より安房の遠山にやあらん。雲霧の間に横たはれり。松山にのぼれば、沖つ宮ことに神さびて、梅の盛にあへるもうれし。岩屋にゆくとて、ぬれたる岩の苔ふみあるくに、これといふ事もなけれど、見るもの聞くものすべて樂し。」

まして夏の涼しさは松風のみにも非ず。よせてはかへる潮にも、わが身を共にとぞ思ふ。ある年の望の夜、この島にやどりて、月見せし事もありき。忽に高潮のさし來て、歩み來し路も絶えぬ。鳥居の石ずゑにあがりて、鎌倉山にさしのぼる影をながめしは、五六年や

金の龍

いづこはあれど

へだつらん。金の龍こそ一度に海をたゞよひけれ。

鎌倉は長谷もよし。ちごうちつれて行きつる時、老尼の佛の御供とて、くだしものくれたる事、いつもおもひいでゝは笑ふ。椿のもとにたゞずみて、稻村崎見やるなど興ふかし。鶴岡こそいづこはあれどことに鎌倉めきたれ。いてふの梢のまづ目につくは、昔語のしるべなるべし。葉もなくてたてるもすごし。黄ばめるころの風の音もさびし。月あはれに霞める夕ぐれ、紅梅の落花にうたれたるきしも、思ひいづれば四年になりぬ。

いかめし

鎌倉の宮の櫻色づくころは、いづこの畑つらも、黄なる雲におほはれて、天までにほふ心地す。頼朝卿の墓いとあはれなり。常磐木花の木など、木立ふるめきて、いかめしかりし其代のなごりも見えず。春雨のそぼふる日にまうでしぞ、わきて心も消ゆるやうなりし。」

ことしの一月もさまよひめぐりしが、名も知らぬ古塚のかげに、枯れたてる薄の嵐にむせぶなど、古跡の感情をひく事多く、何ならぬ古寺にも、あはれ催さる土地なりかし。されば古寺拜まんとて人も行くなり。潮あぶる序にとて人も行くなり。入相の鐘まばら

にきこえて、霞みわたる松原に、歌おもふ人わが外に
ありやなしや。　（天和田建樹）

ありやなしや

二五　死して惜しまるゝ人たれ

生れて長じ、長じて死す。禽獸かくの如く、植物かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸植物と異ならんと欲せば、生れて生れがひある人たらんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して舉國の悼惜を受くる人たらんことを望む。人生れて呱々の聲を發するより、長じて一個の成人

生れがひある人

舉國の悼惜を受くる人

呱々の聲

となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず。之を近くしてまづ父母の洪恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の道を知らず、たゞ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此間晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦、以て我等を保育し、以てわが生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。

之に次ぐに師長の恩あり。我等が僅かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に說くに道德を以てし、必要な

自營自活

晝夜を問はず寒暑を論せず

黑白を辨ず

事理道德

る學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものはわが師長に非ずや。

仁慈なる大御心

更に又至尊及び國家に對する恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる御靈德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は、生民の安寧を維持し、其福祉を增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我父母師長をして我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。若し國家にして其務を爲

宏大なる御靈德

福祉不逞

慈愛薰陶

塗炭

水火の苦と同じ

亂離塗炭の苦由なけん

さずんば、生民亂離塗炭の苦に陷りて、我等は遂に安全なる發育を遂ぐるに由なけん。我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て此等數者に酬ゆるは、人間當然の義務に非ずや。

修養の時期

然れども人間の生涯は實に區々たり。或は其修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重の光陰を送り、體軀徒に長じて、當に自營自活以てわが生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能、其父母の恩に報ゆること能はず。其師長の恩に酬ゆること能はず。況や國家

無爲無能

生を爲す所以

が生を成す所以に對ふること能はず。朝に起きて食ひ、夕に食うて睡る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に

醉生夢死

國家の蠹賊

國家の蠹賊、人間の最下なる者なり。又其無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に從ひ、國家に對して多少の裨益を爲し、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば勝る事萬々なりと雖も、斯の如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、其一生の經營事業の永

裨益

流風遺韻

理想とすべき進境

く後世に德し、其流風遺韻の遠く子孫を動すに足るものなし。かくの如きは當に我等の理想とすべき進境に非ず。我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、其畢生の事業は、以て我等が父母、師長、國家、社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たる者あり、後世子孫をして永く其餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩を爲したることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實に此に外ならず。

餘裕綽々

長へに追憶す

それ生きて一鄉の爲に功ある者は死して一鄉の爲、

闔國民

逝く者は日夜に是あり

丈夫の本懷

前途遼遠

に惜しまれ。一郡の爲に盡くせる者は一郡の爲に悲しまる。若しそれ其事業國家全體の進歩を助成し、其忠誠能く闔國民に認めらるゝ者に至りては、其取る所の何の道たるを問はず、其人の存否は、直接間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。是を以て其人一たび逝くや、國を擧つて之を惜しまざるはなし。嗚呼天下の廣き、逝く者は日夜に是あり。而して其死の天下に知らるゝ者幾何ぞ。一たび死して國を擧げて之を悼惜す。豈丈夫の本懷にあらずや。少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も一生の覺悟は即ち今日より定め置かざるべからず。知らず、有望の諸子は、死して人に省みられざる人とならんとするか。一郷一郡の爲に惜しまるゝ人たらんと欲するか。抑も亦擧國の悼惜を受くる士たらんと欲するか。

（嘉納治五郎、國士より）

二六　近藤眞琴

近藤眞琴、幼名鉚之助、後芳隣と稱す。志州鳥羽の藩士。嘉永二年を以て麴町の藩邸に生る。四歳にして父を喪ひ、慈母に鞠育せらる。母氏賢にして學あり、教養苟

藩邸＝徳川幕府諸藩主ノ報ヲ埒ス為ニ江戸ニ藩邸ヲ置カシメ之ニ各其妻子ヲ住マシム是ニ藩邸トシテ其妻子ヲ居ラシムルトキハ直ニ人質トナリ

もせず。眞琴幼より師に就て儒學を攻め、精苦懈らず、傍ら蘭學を修めたり。後浦賀に米艦を觀る。こゝに於て海外の事情を審にするは時務を講ずるものゝ當に急とすべきものなるを思ひ、もと學ぶ所を棄て、一意蘭學に傾注す。當時大村益次郎村田藏六と假稱し、蘭學塾を神田於玉ヶ池に開く。眞琴よりて贊をこれに執り、孜々としてその學を講ず。後矢田景藏、荒井郁之助等に從ひ、數學、測量法、航海術等を學ぶ。眞琴の發憤、もと時世の刺衝によること多しと雖も、一は自國の海防上に繫念すること少からざるに基く。

時世の刺衝

名聲藉甚

志摩は一小半島國なり。三面皆海を環らし、一たび敵艦の襲ふ所となれば、生民皆砲彈の下に立たざるを得ず。これに對するの法、海軍を設けて外敵を邊海より掃攘するに若くはなし。こゝに於て必要なるは操艦術の講究なり。故に眞琴身を以て之に膺らんとし、主として航海術を攻む。次で蘭人ピラルの航海書を譯出し、これを世に布く。よりて名聲の藉甚を致し、天下航海のことをいふ、先づこれを眞琴に問ふ。文久三年擢でられて幕府の軍艦操練所教授となり、更に餘暇を以て徒に授く。當時眞琴は四谷阪町の鳥羽侯の

別邸に栖めり。四方道を問ふの士、來つて其門に聚り、眞琴爲に蘭學、數學、測量術等を講じてこれに誨ふ。宛然一講學舍なり。これを攻玉社の前身となす。後これに英語の一科を加ふ。

宣傳

近藤氏の攻玉社は、江戸の福澤塾、大阪の緒方塾と共に、日本の新文明に參與したる功績頗る大なり。福澤氏の經濟學、緒方氏の醫學は、共にこの學最新の宣傳者たる如く、近藤氏の航海術は、實に歐洲近代の操艦法を吾に接引したる最初の媒介者たりといふべし。且つ攻玉社は獨り航海術のみならず、語學と各般の

福音

科學とを傳へ、儒學と國學との外に何等の學問なかりし當時に、はじめて泰西諸科學の福音を宣傳せしものなり。彼は日本海軍の恩人たるに止らず、更に最近科學の傳道者といふべきなり。

幹旋

然るに幕府の運命日に壓迫し、國家多事、各藩皆自衞の急なるより、鳥羽侯亦眞琴を召還し、これを國事の幹旋に膺らしむ。故を以て攻玉社の前身はこゝに撤廢せられぬ。次で明治維新中興の大業成り、各藩の人才一躍して廟廊に立つの日、眞琴亦兵部省に徵され、その蘊蓄したる兵事上の技能を日本海軍の上に振

廟廊に立つ

ふことを得たり。こゝに於て舊門生等亦競うて其門に聚り、鳥羽藩邸に於ける彼の寓居は、殆んど一席の地なきに至れり。官よりて殊に元一橋邸内に官宅一區を賜はり、且生徒の寄宿に便する爲に、邸内の長屋を以て之に附せり。こゝに於て門生日に進み、戸裡、履常に充つ。この時はじめてその家塾に攻玉社の名を冠するに及べり。義は他山の石、以て玉を攻むるに取るなり。

名を冠す

他山の石

他ノ山ノ石ヲ持テ来テ玉ヲ磨ク人ノ譬ヲ聞キ己ノ智ヲ磨クカレ

後海陸軍の所屬を別つや、官新に海軍兵學校を設け、眞琴を擧げて一等教官教務總理となし、從五位に叙し、海軍中佐に准ず。これより海軍士官の教養に任じ、餘力攻玉社に子弟を教授し、晩年全く力を攻玉社に注ぐ。日本海の奇捷に勇名を博せる上村中將の如き、亦前年老西郷の指示により特に攻玉社に學びし健兒の一人なり。その他海軍の要樞にあるもの、概ね學を攻玉社に受けざるものなし。日本海軍の進歩、一半は功を近藤氏に歸せざるべからず。

眞琴明治十九年八月四日を以て歿す。享年五十六。攻玉社の日本海軍に效せる功績は略前に擧ぐ。然も同黌の貢獻はこれに止らず。例せば實吉醫學博士、中

要樞

村、寺野二工學博士、岡村、山口二理學博士、藤田四郎、茂木鋼三郎、志賀重昂諸人を出せるによりても、同黌の新智識を現代に供せる一事毫も疑ふべからず。眞琴又國學に長じ、嘗て假名の會を起ししことあり。又言葉の園六卷を著はす。性廣學、博通、和易の德に富み、理を擧示して人に諭すに、噫然として通せずといふことなし。蓋し近代の一俊傑たるを失はず。

（近世英傑傳）

和易
噫然

二七　下瀨火藥

特長

明治三十七八年の戰爭に始めて實戰に用ゐられ、怖るべき爆發力を以て世界を驚かしたる下瀨火藥は、海軍技師工學博士下瀨雅允氏の發明に屬す。この火藥の特長は、單に爆發力の猛烈なるのみならず、取扱の極めて安全にして、永年變質せざる所にあり。例へば尋常の打擊を加へ、若しくは高所より投下するも發火せず、火を點ずれば松脂の如くぢく〳〵と燃ゆるのみにて決して爆發せず。これに榴彈をうち込めば僅かに燃え、極小量の水にて消し止むるを得べし。

榴彈

大ナル丸ノ中ニ多クノ小丸アルモノナリ

裝塡

又綿火藥の如く水分を加減する必要もなく、一度水雷なり彈丸なりに裝塡すれば、幾年を經るも變質する事なし。現に下瀨博士が發明以來十九年間貯藏せる火藥、今なほ毫も藥力を減ぜずと。これを水中におく場合に於ても、數日水にさらしてなほ爆發力を失はず。下瀨火藥は取扱上、貯藏上の便利よりいふも、優に世界第一と稱するを得べきなり。

下瀨火藥はその發明以來、今回の戰爭に實用せらるる迄には數回の試驗を經たるが、毎時怖るべき好成績を得たり。その一例を擧ぐれば、明治三十一年相州鵠沼の海岸に於て大試驗を行ひし時、或巡洋艦の舷側に模擬したる石炭庫を造り、これに下瀨火藥を充塡せる六吋砲彈を打込みたるに、その穿ちたる穴は徑三尺に及び、砲彈破裂のため外壁、石炭、土砂等の粉碎せられて飛散せる狀實に凄じく、暫時が間は一面濛々として物色を辨ぜざりきと。さて比較のため次に普通の榴彈をうち込みたるに、舷側にはたゞ六吋だけの穴を穿ち、其砲彈は石炭内に入りて破裂したれども、させる慘狀を呈するに及ばざりき。

次に又某試驗所に於て、敵の防材に擬し、杉の材木尺角

模擬
粉碎
濛々として物色を辨ぜず
させる

角の九尺物を二間許積みて的となし、これに例の下瀬火藥六吋砲彈をうち込みたるに、其結果、滿足なる尺角は上下僅かに三四本だけにして、その他は盡く粉碎し了りぬ。普通榴彈を以て同じ試驗を行ふに、單に六吋だけの孔を穿ちて的を貫き、三尺位の彼方にて始めて破裂し、その破片は四五十度の角度をなして飛散し、その片數も僅かに二三十個に過ぎず。その災害決して驚くべきにあらず。下瀬火藥六吋彈の破片に至りては、其數二千五六百に及び、其角度も上下左右滿面に飛散するが故に、その近傍に立ちをる者

一歩一歩相前後して競進す

いに徵するに

は一人として傷害を免るゝ能はず。

破壞作用の進歩と防禦方法の進歩とは、一歩一歩相前後して競進するものなれば、下瀬火藥の威力の如きも、到底無上と稱すべからざるは論なしと雖も、三十七八年の戰爭(殊に日本海大海戰)に徵するに、從來普通砲彈の攻擊力を疑はしめし甲鐵艦に對する我下瀬火藥の破壞力は、實に世界の專門家を驚かしたるものありしなり。

然れども下瀬博士自身も言はれたる如く、戰の勝敗は單に火藥機械の精粗によらずして、寧ろ多く將校

の作戰、兵卒の技術によるものなるを知らざるべからず。否寧ろ多く戰士の忠勇なる心膽によるものなるを覺らざるべからず。

兵器は死物なり

要するに兵器は死物なり。これを活用すると否とは人にあり。何ぞ下瀨火藥をのみ賴むべけんや。

二八　狂熱

昔、良秀といふ一畫工あり。其家火災に罹る。一物をも携へずして出でゝ火焰を熟視し、手を拍つて喜ぶ。傍人怪んで問うて曰く、「君の家も、君の所持品も、すべて

烏有に歸す

烏有に歸せり。悲しみこそすべけれ、何の喜ぶ所あらんや。」と。答へて曰く、「われ不動明王を描かんとせしが、如何にしても面白き火焰を描く能はずして苦しめり。然るに今火災に遇ひて、火焰を描く祕訣を覺り得たり。これ余の喜ぶ所以なり。」と。あゝ一の不動を描かんとて、我家の燒くるをも顧ず。これ世俗の目して狂熱となす所にあらずや。

祕訣

世俗の目してゝとなす所

座客

辯駁

蒲生君平、厠にありしに、座客楠公を罵る者あり。君平じつとして居られず、出で來りて大に之を辯駁す。異臭迸る。衆之を熟視するに、君平の持ちてあふぐ團扇

は厠中にありしものにて、君平厠中に蚊をはらひし際糞つきしが、これにも氣附かず、そがまゝ持ち來りてあふぎしを以て、その糞器皿にとびちりて、かくは臭氣を發しけるなり。かくの如きも世俗の狂と見なす所なるべし。

然れども思へ。狂にあらずんば何事かよく大成せんや。君平にありては、平生崇拜する楠公の罵らるゝは器皿に糞つくよりも尚きたなく思ふなり。良秀にありては、不動を巧みに畫きて、世に一大美術を殘さんことが何よりも大事なり。家を失ふも、所持品を失ふ

這般の消息一時を苟偸

天才狂に近し

ゝゝの域に到る

も、そは何んでもなきなり。かゝる熱心ありたればこそ、君平は萬古勤王家の名を殘したるなれ。良秀も定めて傑作ありしならん。這般の消息は、一時を苟偸して私利を營む利口連の能く解する所に非ず。

天才狂に近しとは事實なり。狂とは世俗に對して云ふなり。一風かはりて世俗以上に超脱す。故に世俗之を目して狂とはいふなり。世俗は熱するも大に熱する能はず、一時熱するも忽ちにして冷却す。故に狂と目せらるゝの域に到る能はず。故に人を駭かすに足るべき傑作奇功なきなり。

常識の價値
小器用
落莫
感情に馳せ欲念を縱にす

吾輩常識の價値を認む。されどあまり常識に過ぐれば平凡となり、通俗となり、小器用となり、終に大に奇なる能はず。何事も利害を打算するに急なるを以て、大なる失敗なき代に大なる成功もなし。一望平野、高山なく大川なし。熱して狂するの奇才なくんば、吾人は人世の落莫たるに堪へざるに至らん。（青年界より）

二九　平清盛と源頼朝

平清盛と源頼朝とは畧、時代を同じうせしもの、しかも傾向のかくの如く相違へるは少し。清盛は感情に

意氣揚々
懊惱煩悶
除外例
一時を快とす

馳せ慾念を縱にし、時に大に喜び、時に大に怒り、少しく順境なれば意氣揚々乘じて止まざれども、少しく逆境なれば懊惱煩悶、從容事を圖るに堪へず。近臣をして成親を笞たしめ、壁を隔てゝ其泣聲を聽ける、以て其子供らしきところを見るべく、上皇の舉措を怨み、己が功の大にしてしかも罪せられんとするの非理なるを訴へたる、以て其眞情を見るべし。

當時の平族は皆幾何か此風を帶びざるなく、獨り重盛は除外例たれども、其除外例たるがため同族の間に容れられず、憂悶して早く斃れぬ。總じて一時を快

徐に前途を虞る

適切なる評

喜怒色に形る

機會の乘ずべきあり

とするに急に、徐に前途を虞るが如き事なく、所謂「驕る平氏久しからず。」とは最も適切なる評といふべし。

賴朝は則ち然らず。喜怒色に形れず、事を成さんとするや、まづ其前路を考慮し、困難の横たはるを知るや、機會の乘ずべきありと雖も輕々しく乘ぜず。富士川に平氏と對陣し、水禽の亂れ飛びて敵軍を潰走せしめし時、かれ喜びて直に追はんともせず、靜に軍を纒めて鎌倉に還れり。義仲を討ち、平氏を覆さんとするにも、二弟をして軍を帥ゐしめ、己容易に出でず。景季の池月を乞ふや、乃ち磨墨を與へ、諭して云ふ、「他はわ

乘に充つ

最後に勝を占む

一舉一動歷々見るべし

「過ぎたるは猶及ばざるが如し」

が乘に充てんとする所」と。而して高綱の來り見ゆるに及びて、之を給せり。總べてを指揮して己最後に勝を占めんとする所、一舉一動に於て歷々見るべし。平氏既に滅びて、共に功を爭ふ者亦斃れ、心慮を勞すべき者跡を絶つに及び、乃ち大に士卒を集め、列を正して京都に出でたり。其二弟を殺して自ら枝葉を芟るが如き、一見淺慮の所行なるに似たれども、實は將來を慮るの深きに過ぎ、過ぎたるの猶及ばざるが如きものあるのみ。源氏の一門は其性格に於て多く類似する所あり。獨り義經は群を脫せしが、其群を脫せし

異彩を放つ

が爲、異彩を放つて早く斃れたり。（三宅雄次郎、大塊一塵）

三〇　品性

人の尊卑は何によりてこれを判すべきか。かの飽食暖衣大厦高樓の内に住み、世間生活の辛苦を知らざるもの尊くて、弊衣粗食草屋茅舍の内に、わづかに雨露を凌ぐもの卑しきか。かの財力あり才能ありて人の上に立ち、おのれは拱手して數多の人を頤使するもの尊くて、人に使役せられ日夕營々として勞動するもの卑しきか。世或は然りと答へん。われらは必ず

拱手
頤使イシアゴヤ用ヲ

素養

しも然らざるをいはんと欲す。

いづれの職業を問はず、完全無缺に之を行はんことは、尋常一樣の才能にては難かるべけれども、唯一とほり之れを行ふには、さまで素養と才能とを要せざる職業もあり。中には唯一とほり之を行ふにも、頗る素養と才能とを要するもあり。然れども前者に從事するものを直に卑しとなし、後者を直に尊しとなさんは、是亦われ等の意を得たるものにあらず。

生活の程度も、職業の種類も、人の尊卑を定むる標準とすること能はずば、われらは畢竟何を以て人の尊

卑を定むるぞといふに、その標準は他ならず。その人の心事の高潔なると卑劣なるとの差にあり。卽ち品性の如何にあり。世間財力ある者その財力を働かせて事業をなすに、彼等は眞正に國家の發達を助成すべき意思ありて、之をなすか。抑また口に美辭を列ぬれども、其心は私利一點の外にあらざるか。かの才能ある者、其能を抱いて要路に立つに當りて、彼等は其地位によりて、眞正に國家を發達せしむることを忘るゝなきか。抑もまた其地位を利用して、窃に、私利をはかるに遑なきか。つら〳〵滔々たる天下の大勢を

潤步清廉

察るに、その後者に屬する者多く威勢を有し社會に闊步し、清廉の士はその汚濁なるに堪へず、目を閉ぢ耳を掩うて、見ることなく、聞くことなからんと欲するが如し。是何の故ぞ。他なし、社會は人の尊卑を定むべき標準を誤れるによれり。卽ち社會は人の外觀とその地位とを見て、其品性の如何を問はず、品性下劣なれども、外觀の壯大にて勢力ある地位に據れるものは、世間は直ちにその人を見て、尊しとなす。かくの如くにして是等の輩が、ます〳〵社會に跋扈するに至るは自然の勢なり。

前途有望

前途有望なる諸子は、この忌むべく悲むべき天下の大勢を趁うて走るべからず。諸子が將來社會に出でん日、その執るべき職業は種々なるべし、その立つべき地位は亦種々なるべし。然れども、其職業と、其地位との如何を問はず、其心事は、必ず高潔ならざるべからず。その行爲は必ず清廉ならざるべからず。諸子が自ら期することかくの如くにして、然して人の尊卑を品評するには、常に標準をその人の品性如何に取らば、卑劣なるもの汚濁なるものは、おのづから社會の制裁を受けてその勢力を失墜し、高潔なる者正大

心事高潔

勢力失墜

コンダク　濁濁　ニゴル

風潮一變

刮目

なる者は、自ら勢力を得て、天下の風潮はこゝに一變し、溷濁の空氣こゝに一洗せらるゝに至らん。よくかくの如くならんか、國家の發達は、必ず刮目して見るべきものあらん。アモス、ローレンスいはく、「人に必要なるは富にあらずして品性なり。縱令全世界を手にすとも、その品性を缺かば何かせん」と。まことに然り。

（嘉納治五郎の文による）

三一　人と自然

地球上一切の萬物は動物、植物、鑛物の三界に屬せざ

自由自在に利用す

るものなし。人は地球上の一動物にして、しかも此三界の萬物を自由自在に利用す。これ一に人智のはたらきによれり。

鎔解分析し

人は早くより火を用ふることを知れるを以て、其力によりて、鑛物を鎔解分析し、種々の金屬を得、金屬を用ゐて、各種の家具、武器、裝飾具等を作れり。陶器、硝子の如きも亦鑛石を利用して作れるものなり。火あればこそ菜肉の別なく食物を調理し、茶水の類をも煮沸するを得るなれ。さて其食物としては牛豚を養ひ、魚貝を捕ふるのみならず、米、麥、蔬菜を植ゑ、衣服の料

花卉

に至りても、或は木綿、麻の如き植物より取り、或は蠶、羊の如き動物より取る。

かくの如く生存の必要のために萬物を利用するのみならず、或は花卉を培養し、或は魚鳥を養ひて、心目を娛ましむるの具に供すること亦尠からず。諸子試に其一二を言へ。

大層輪奐の美觀

丹青の枝神を奪ふ

見よ、一片の木屑、一塊の石、美術家の手によりては美麗なる彫像と變じ、材を組み石を組みては、よく大厦輪奐の美觀を作り出す。色彩を巧みに用ゐれば、丹青の技亦神工を奪ふにあらずや。

人はかくの如く自然萬物を利用するのみならず、又地球の表面を變化す。平野に都市を起し、堂塔城廓を築き、田畠を耕し、森林荊棘を開拓し、瘠地を變じては沃野となし、寒冷なる氣候も變じて溫暖ならしむ。海には湊を作り、山には道を開き、鐵道を架し、運河を通ず。舟楫一たび通ずれば遠隔せる民は隣人となり、一地方にのみ生存する植物動物を交換しては其繁殖を助け、其地方の面目を一新せしむ。今や貿易の道盛に行はれて、有無相通じ、四海全く比隣の如し。

舟楫一たび通ず

有無相通じ四海比隣の如し

文明と野蠻との區別は、其如何程迄自然物を利用し、

克服し得るかによりて定まる。國の野蠻なれば野蠻なる程自然に服從し、文明なれば文明なる程自然を克服す。學術上の研究、發見等は常に吾人をして一歩づつ自然を克服するの道を教ふるものなり。

自然に服從す

自然を克服す

再訂

明治讀本卷四

終

明治三十八年十一月十五日印刷
明治三十八年十一月十五日發行
明治三十九年二月五日訂正印刷
明治三十九年二月十五日訂正發行
明治四十年一月十日訂正再版印刷
明治四十年一月十七日再訂四版發行
明治四十年十一月十二日再訂四版印刷
明治四十三年二月九日再訂三版發行

再訂明治讀本奥附

定價 全十冊 各金貳拾五錢

著作權所有

著作者 芳賀矢一

發行兼印刷者 東京市神田區裏神保町九番地 坂本嘉治馬

發行所 東京市神田區裏神保町 電話本局一〇三六番

販賣所 東京市神田區南乘物町 電話本局八九二番 電話本局一六四番

合資會社 富山房

明治圖書株式會社 振替貯金口座四九一五番

印刷所 日清印刷株式會社